

「夢桃香」の栽培管理の手引き

(品種登録名：甲斐トウ果17)

山梨県オリジナル品種ブランド化推進会議

1. 品種の来歴

- ・「夢桃香（ゆめとうか）」は、山梨県果樹試験場が、早生のオリジナル品種を開発するために、平成18年に「モモ山梨6号（ちよひめ×八幡白鳳）」に「日川白鳳」の花粉を交雑して育成した。
- ・平成31年4月23日付けで「甲斐トウ果17」の名称で品種登録され、令和2年2月18日に「夢桃香」の名称で商標登録された。

2. 品種特性

- ・成熟期は果樹試験場（標高440m）において7月上旬で、「日川白鳳」の後となる。
- ・硬度が2.0kg程度まで軟化するが、それより軟化しにくい新しいタイプの肉質のモモで、これまでの品種にはない特性を持つ。
- ・平均果実重は340g程度、糖度は14度程度、pHは4.6程度である（原木10～14年生：H28～R2 平均値）。
- ・花粉を有し自家結実する。果形は短楕円でやや縦長の果形となる。
- ・核割れや傷等からの軟化はなく、収穫後もほとんど軟化しない。
- ・果実の果梗部に三角形の亀裂が発生することがある。
- ・一般のモモより長く樹上においても過熟による果実軟化は見られないが、老化による果肉褐変、傷等からの腐敗が生じることがある。



3. 栽培管理方法

3-1 摘蕾・摘花

- ・花粉を有するので、摘蕾・摘花をせず全ての花を結実させてしまうと貯蔵養分を消耗してしまい、初期肥大不良や新梢の生育不良の原因となる。そのため、摘蕾・摘花を実施して貯蔵養分の浪費を防ぎ、新梢の初期生育や果実肥大を良好にする。
- ・基本的には、中長果枝は先端と基部や枝の上向きの蕾を摘蕾・摘花する。短果枝は基部の蕾を摘蕾する。

3-2 予備摘果

- ・不受精果がはっきりと区別できるようになる満開後20日頃から実施する。摘果の程度は目標とする最終着果量の2～3倍を目安に行う。上向き果や傷果を優先的に摘果する。

3-3 仕上げ摘果

- ・満開後50日頃から始める。この時期になると双胚果、変形果などが判別できるようになるため、果形がよく病虫害被害や傷のない健全果を残すようにする。

3-4 袋かけと除袋

- ・本品種は、無袋でも裂果の発生はないが、樹冠内部の日当たりの悪い部位では着色がやや悪い傾向がある。そのため、現時点では有袋栽培を推奨する。
 - ・除袋の時期は袋の種類によって異なる。また、着色期の天候により除袋時期を決定する必要がある。一般的に除袋の適期は、果実の縫合線と尻の部分を除いて果実表面の地色が抜け、淡緑白色に変わるころである。
 - ・天候不順が続く場合は、1～2日早めに除袋する。
 - ・果頂部に色が飛んだ頃に除袋する。
 - ・天候により着色不良の可能性があるため、除袋が遅れないように注意する。
- ※除袋から収穫まで2週間くらい。年によって長びく可能性がある。

3-5 着色管理

- ・除袋後は樹冠下に反射マルチを設置し、着色を促す。徒長枝や樹姿を乱す恐れのある新梢などを中心に捻枝や摘心を行い、樹冠内部の明るさを確保する。

3-6 収穫

- ・収穫始め時の果実硬度の目安は2.5 kg程度だが、**通常のものに比べて弾力がなく、果実の弾力を目安に収穫することが難しい。**
 - ・**実際の収穫には、成熟日数や「日川白鳳」など成熟期に近い品種の生育や収穫の状況を見ながら、定期的に成熟度合いを確認し、地色の抜けを目安に収穫する（図1）。**果実硬度は徐々に低下するが普通モモのような弾力はないので、本品種の収穫に慣れるまでは、定期的に食味を確認する。
 - ・着色のみを収穫の基準にすると早もぎとなってしまうため、果肉は硬いまままで青臭く、糖度も低い状態となってしまうため、特に注意が必要である。
 - ・樹上で硬度の低下はゆるやかで、急激に過熟になりにくいので、収穫適期を見極め、早もぎはしない（図2）。**ただし、樹上で果実を長く置きすぎると果肉の紅色素及び老化による果肉褐変の増加や樹勢低下を招くおそれがあるため注意する。**
- ※果梗部に三角形の亀裂が見られる果実は、品種特性の一つであり、その程度によって共選扱いになるので、出荷目合わせ会等で確認する。

＊参考値：満開から収穫始めまでの日数（成熟日数）：86日（H28～R2の平均値）

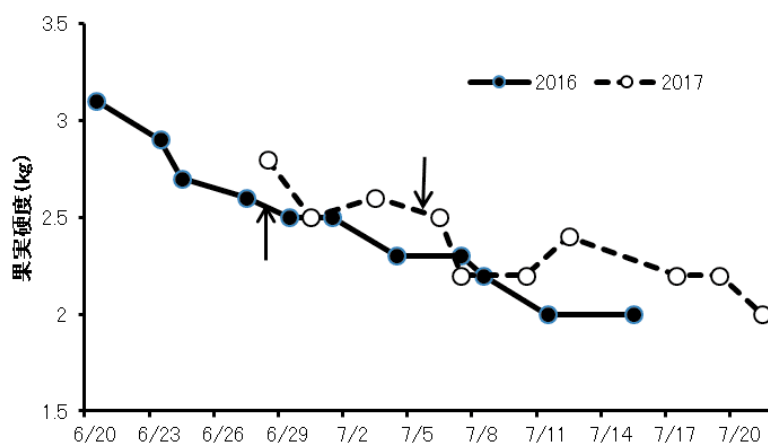


図2 「夢桃香」の硬度の推移（矢印は収穫始め）

- 着色だけを基準に収穫すると早もぎになるため、地色の抜けを目安に適期を見極める。
- 収穫始め期以降も硬度の低下は緩やかで軟化しにくく、樹上で果実を長期間おくと赤肉や老化による果肉褐変が増加する。

山梨県オリジナル品種「夢桃香」収穫基準

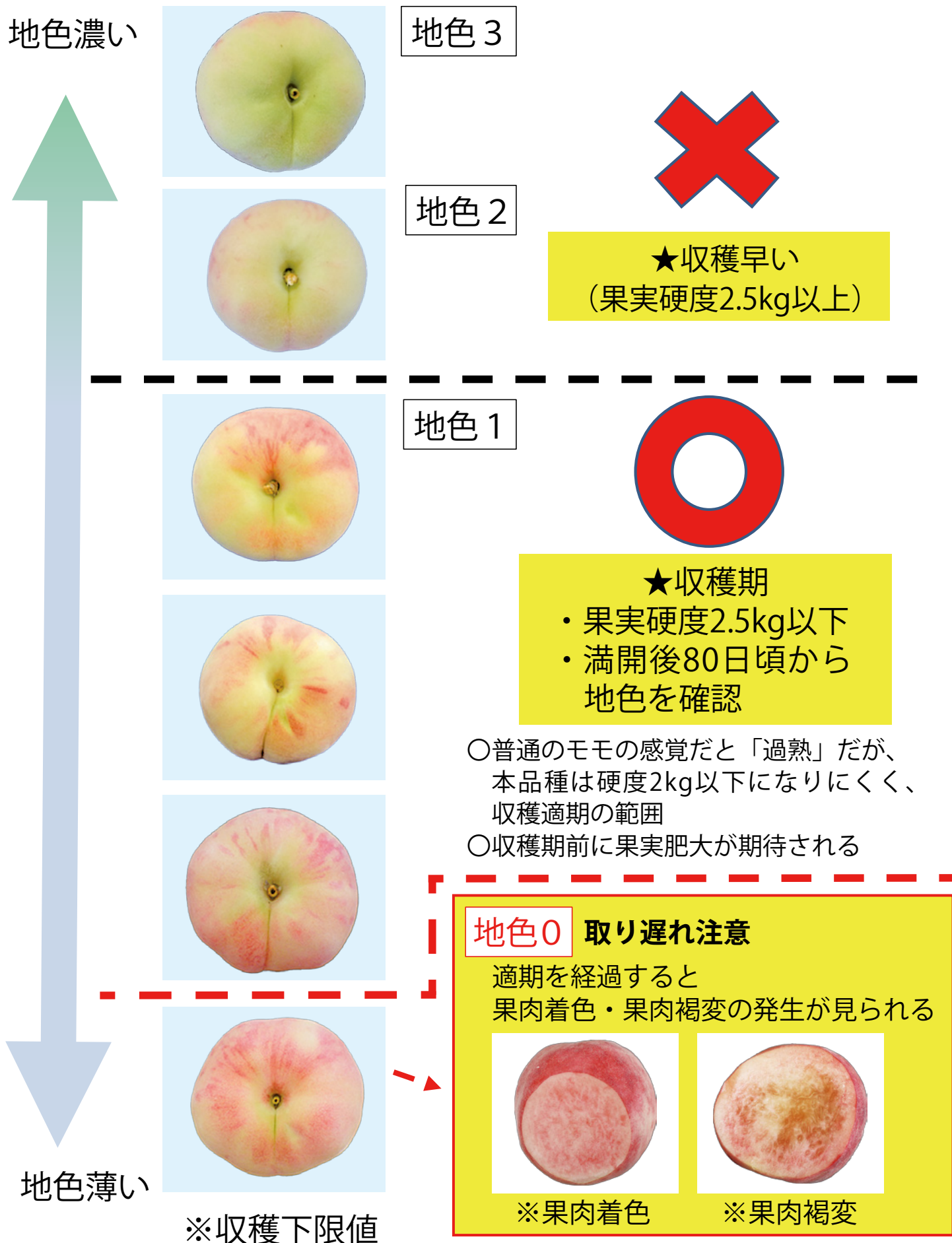


図1 収穫期の地色の目安

4. 病虫害防除

- ・果樹病虫害防除暦「もも（早生種、中生種）」に準じて防除を行う。

5. その他

- ・樹勢維持や核割れ果の発生軽減のため、気象の推移や土壌水分の変動に注意し定期的なかん水を行う。施肥管理は、施肥基準（早生種）に従い、樹勢を見ながら加減する。

6. 幼木期の管理

- ・幼木は根の張りが浅く、乾燥の影響を受けやすいため、定期的なかん水を行う。
- ・草生栽培園では、養水分の競合を避けるため、根元は清耕栽培とするか敷ワラ等の乾燥防止対策を徹底する。
- ・生育を促すため、摘蕾・摘果により最小限の果実を残す。特に、樹冠を拡大させていく主枝、亜主枝候補枝には着果させず新梢の生育を促す。
- ・樹冠拡大と骨格づくりのため、先端と競合する新梢は摘心や捻枝を適宜行う。
- ・軟弱徒長生育を防ぐため、必要以上の施肥をしない。
- ・冬季せん定では、切り口からの枯れ込みが発生しやすいので、6年生までの若木のせん定は厳寒期を過ぎた3月上旬以降に実施する。
- ・せん定時に枝の基部を切り残すとその部分が癒合せず、枯れ込みが入ったり、胴枯病菌の侵入口になる恐れがあるため、枝の基部できれいに切る。
- ・切り口の癒合を促進するため、せん定直後に十分量のトップジンMペーストを塗布する。
- ・主幹部から出ている太枝を処分する場合は、枯れ込み防止のため、葉芽のある小枝を数本残す「ほぞ切り」を行う。太枝だけ残して切らない。
- ・冬季の強せん定を回避するため、生育期（5～6月）に新梢管理や秋季せん定(9月)を行う。
- ・特に、幼木のうちは、主幹基部や主枝上から発生した新梢が徒長しやすいので、主枝延長枝の勢力を保つよう、芽かき、摘心、捻枝を随時行う。

問い合わせ先：果樹試験場、各農務事務所、JA営農指導課
印刷：JA全農やまなし

作成 令和3年3月
改訂 令和7年3月